



Interview

まさき たけお
正木 健夫さん
兵庫県尼崎市出身

鬼北町に移住する前は自動車整備士として働いていました。趣味はDIYで、手先を使った細かい作業が好きだった私は、以前からものづくりに興味があったので、泉貨紙の事業継承の話聞いたとき、ぜひ挑戦したいと思いました。

私たちが練習で漉いた紙も乾燥させ、出来を確認しますが、失敗した点を見つけても、何をどのように変えていけばいいのかが分かりません。泉貨紙のことを知れば知るほど、紙漉きの奥深さ、難しさを痛感しています。

鬼北町に来てから、町内でも泉貨紙を知らない人がいることに驚きました。地域おこし協力隊としてきた以上、成果にこだわりながら、たくさんの人にその魅力を知ってもらえるように精一杯活動していきたいと思っています。

Interview

あわの まさおみ
栗野 正臣さん
千葉県鎌ヶ谷市出身



首都圏で開催されていた地域おこし協力隊を募集するイベントで鬼北町の担当者から泉貨紙のことを教えてもらったことが泉貨紙との出会いです。手漉きにこだわった昔ながらの製法に魅力を感じ、移住を決断しました。

泉貨紙は、その丈夫さから、張り物や服に使われていた歴史があります。私は、専門学校で、身の回りにある身近な製品をデザインするプロダクトデザインを学んでいたのですが、今後、その知識を泉貨紙にも取り入れていきたいと思っています。

平野さんの説明は、いつも具体的で分かりやすいです。教えてもらう一つ一つの知識、技術をしっかりと吸収していきたいと思っています。課題はたくさんありますが、伝統ある泉貨紙を生業としていけるように頑張りたいです。

それでも毎年、泉貨紙を作り続けるのは、「泉貨紙を後世に残したい」という強い思いがあるからです。泉貨紙保存会に新たに入会した正木さんと栗野さんも同じ思いを持って、日々奮闘しています。

泉貨紙保存会が漉く泉貨紙は、森の三角ぼうしや日吉産地で販売中。泉貨紙が持つ昔ながらの温かさや懐かしさに触れてみませんか。一人でも多くの人が泉貨紙を手に取り、その活動を知ってもらうことが、地域の伝統を残すことに繋がっていくはずですよ。

泉貨紙の魅力子どもたちへ

1月18日、泉貨紙保存会作業所で泉小学校5年生7人と、北宇和高校生産食品科作物果樹班の生徒3人が楮のかじ蒸し、かじはぎを体験しました。

かじ蒸し、かじはぎは、楮を蒸して、樹皮をはぎとる作業。作業には、平成30年3月に宮城県白石市から鬼北町に送られた虎斑楮と町内で自生していた赤楮を使用しました。この虎斑楮は、約400年前に、宇和島藩から仙台藩へ贈られたという伝聞も残る楮です。

約4時間蒸した楮は手で簡単に樹皮がはげます。

子どもたちは、平野会長らの指導のもと、樹皮がスルツとむける感触を楽しみながら、地域の伝統に親しんでいました。はぎとった樹皮は乾燥させ、来季の紙漉きに使用される予定です。

平野会長は、昨年初めてかじ蒸し、かじはぎを実施し、今回の作業は2度目の挑戦。「町内でこれらの作業が行われたのは、おそらく約50年ぶりになる」と平野会長は話します。泉貨紙保存会は、泉貨紙を作り続けるため、新しい挑戦にも意欲的に取り組んでいます。

